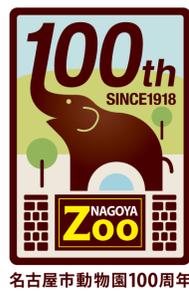


名古屋市動物園 100年の軌跡

History of 100 years in Nagoya Zoo



名古屋市の動物園のはじまり 鶴舞公園附属動物園の誕生



名古屋市動物園100周年

明治23年、今泉七五郎氏が、自ら集めた動植物約1,000種を「浪越教育動植物苑」と名付け、中区前津町で一般公開した。ニシキヘビ、ライオン、トラ、サルなどの動物を揃え、「動物の見世物小屋」として、多くの人で賑わった。

大正時代に入り、周辺からの悪臭苦情や後継者がいないことに悩んだ。大正6年、所有の動物を名古屋市へ寄付した。獣類79点、鳥類273点、ワニ類2点、カメ類27点、ヘビ類48点、魚類52点であった。

名古屋市では大正4年に、市長あての「動物園建設に関する意見書」が議決され、動物園建設の機運が高まっており、今泉氏の寄付を受け、大正7年、「名古屋市立鶴舞公園附属動物園」が現在の鶴舞公園の南西部に開園した。

園内マップ(昭和7年3月市立名古屋動物園要覧-30)



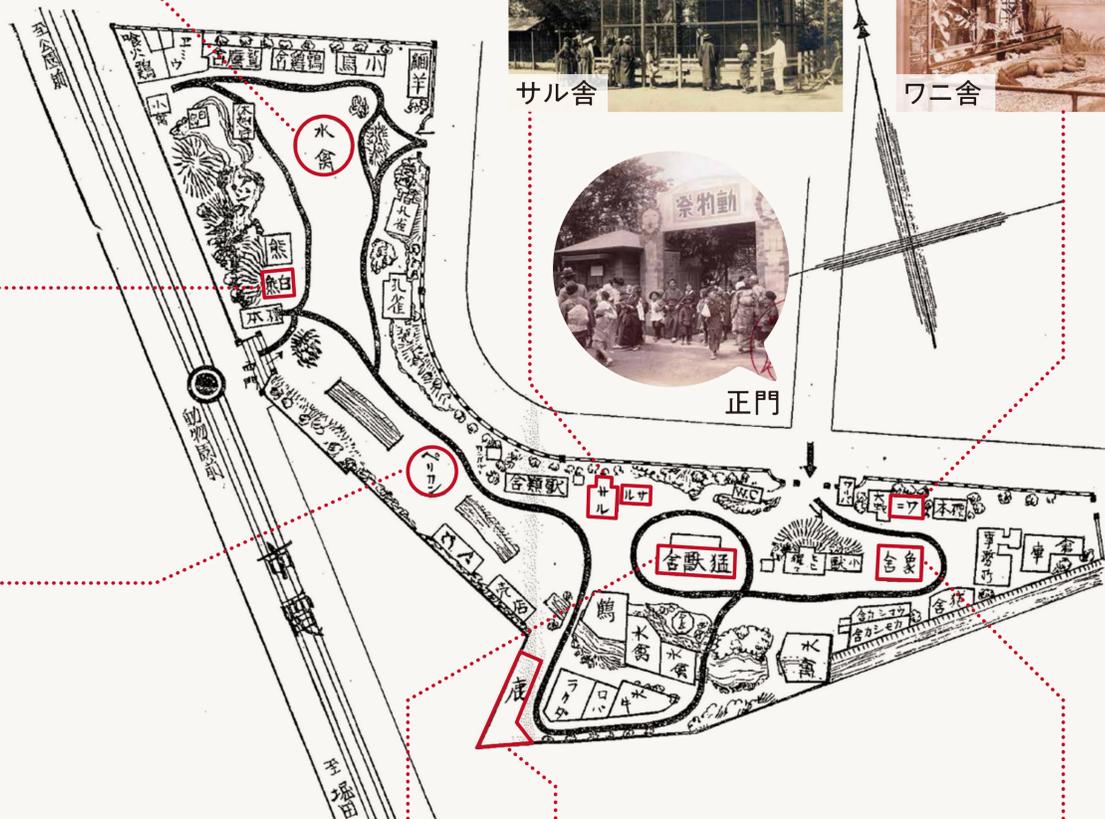
水禽舎



白熊舎



ペリカン舎



サル舎



ワニ舎



正門



猛獣舎

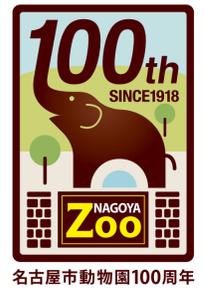


鹿舎



象舎

鶴舞公園時代の 主な行事



鶴舞公園附属動物園は、大正7年に開園以来、展示動物を購入したり飼育設備を改良するなど充実を図りながら、様々なイベントを行っていた。大正8年から夏季には、約1ヶ月間の夜間開園（午後10時30分まで）を実施していた。昭和4年に「市立名古屋動物園」と改称し、昭和7年から11年には動物祭も行われた。また昭和8年10月には、世界動物探検博覧会が開催され好評を博した。

昭和10年の正月には、この動物園の鶴の一声がラジオで全国放送され話題になった。

昭和12年に東山公園へ移転するまでの19年間、市民の動物園として、多くの人に親しまれた。



昭和8年の夜間開園の様子



昭和8年5月「第2回動物祭」ホッキョクグマ舎前



昭和8年10月「世界動物探検博」
自転車に乗ったオランウータン



昭和10年5月
「深夜に猛獣を語る座談会」



昭和6年4月11日
ゾウの花子体重を測る (2566kg)

鶴舞公園時代の動物たち



名古屋市動物園100周年

昭和8年9月、名古屋市が発行した『大名古屋』には「飼育動物は250種800点の多数を集め、特に聖上陛下御下賜※のラオス産の白色尾長猿を始め、ヒマラヤ産の馬鹿、ボルネオ産の猩々、白熊、縞馬等珍とするものが少なくない。」とあり、当時の動物園としては国内外に誇りうるものであった。

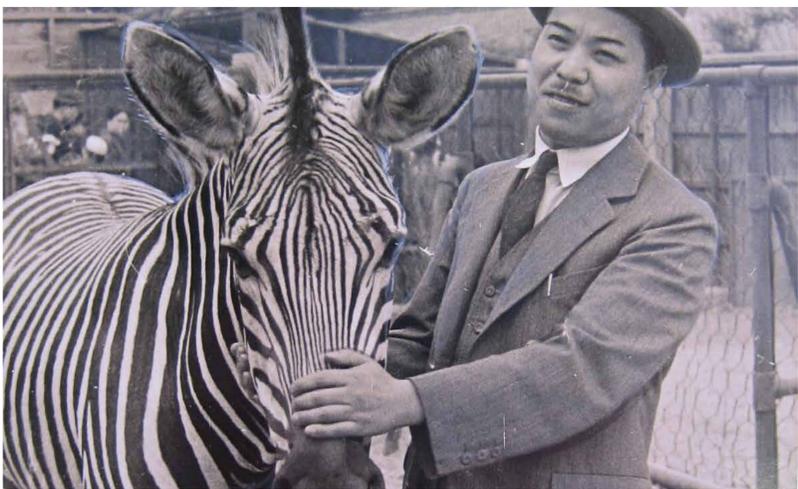
※聖上陛下御下賜…天皇陛下から賜った



オランウータンの「正吉」昭和3年に来園し約10年間飼育した自転車に乗ったりして観客の人気を集めた



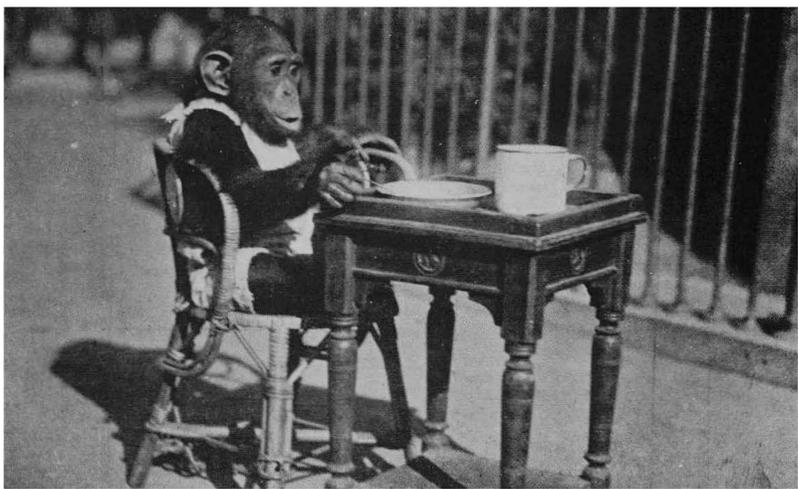
昭和10年9月14日生まれのヒョウの子(昭和10年10月5日撮影)



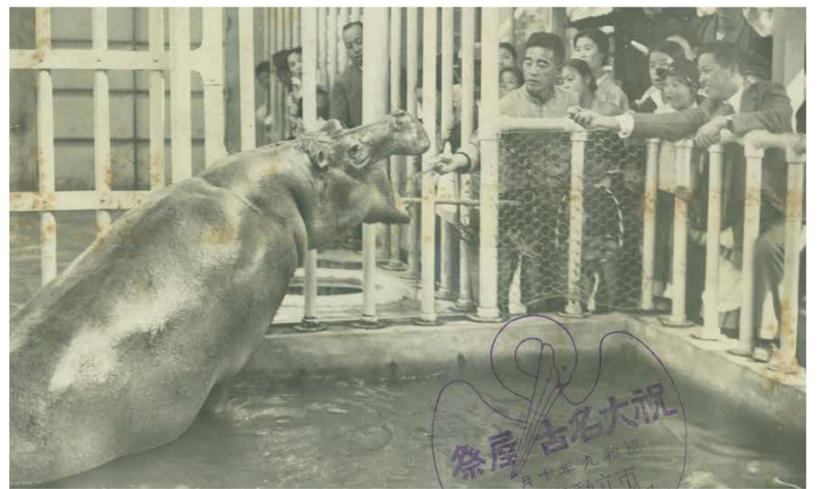
昭和10年5月 北王英一園長とシマウマ



ホッキョクグマは昭和4年6月20日に雌雄のつがいで、ドイツのハーゲンベック動物園より来園



チンパンジー 昭和8年8月27日に来園し、愛称募集して「八郎」と決定するも、昭和9年3月1日に死亡



昭和9年10月1日大名古屋祭 カバ命名式「重吉」
昭和9年5月30日に朝鮮京城動物園より来園

東山動物園への移転



名古屋市動物園100周年

年ごとに動物や施設が充実し、鶴舞公園の動物園も、さすがに狭さを感じるようになった。そこで名古屋市は昭和10年に開園した「東山公園」内に動物園を移転することとした。そして昭和12年3月24日、「東山動物園」が開園した。

面積は166,320平方メートルと鶴舞時代の約13倍。施設は、ドイツのハーゲンベック動物園長の助言を得て、ライオン舎、ホッキョクグマ舎に国内初の無柵放養形式を取り入れるなど当時としては斬新であった。

開園1週間後には、ドイツのハーゲンベック動物園より、ホッキョクグマ、カバ、シマウマ、ニルガイ、ペンギン、サル類などの動物たちが到着した。

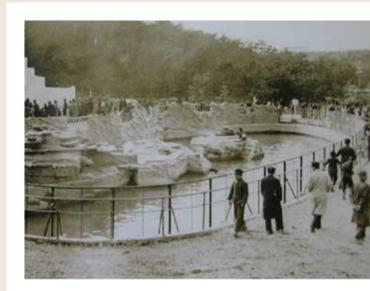
昭和13年には、開園1周年を記念し、古代池に「恐竜の模型」が完成した。その後も、展示施設・展示内容が充実していった。



開園当初の正門



現在のマレーバク舎の辺りから恐竜像方向の写真



昭和12年 アシカ池・ホッキョクグマ舎・恐竜像方向の写真



開園1周年を記念し、古代池に「恐竜像」が完成

↑白熊 氷山模型

↑獅子放養場模型

名古屋市東山動物園

昭和十二年三月十五日 豫定

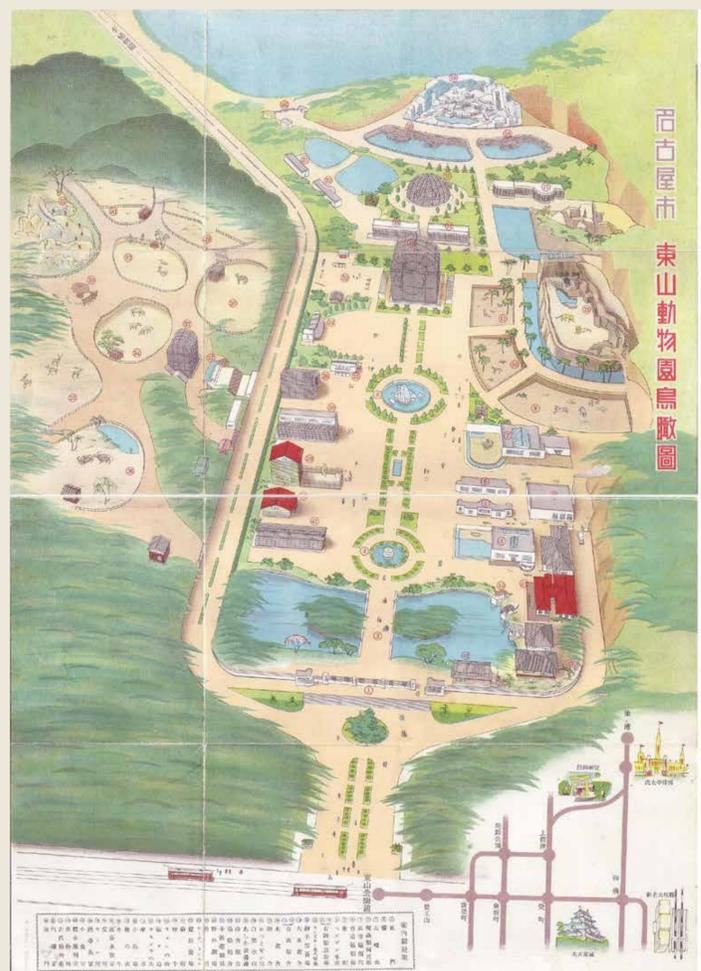
【開園】 東山公園入口に位置する地域約五萬四千七百坪を擁し市電に依つて東山公園前に下車すれば直ちに正門に達し得られ交通極めて便である。

【位置及面積】 本園は鶴舞動物園事業の進展に順應せる最新設計に成り面積擴大にして規模の豪華華麗なることは東洋一と稱せらる。園内には近代式鐵筋コンクリートの階舎が緑樹の間を斷續して一大美觀をなすのみならず各階舎には夫々の動物に應じて其飼育上からも又觀覽の上からも既成動物園の短所を補正せる最新の設備が施されて居る。尙本園の最も誇りとするは猛獸の無柵式放養場であつて之は從來の如く鐵柵を設けずして特殊の裝置に依つて動物の逸出を防ぎ觀覽者は安全に併も何等視野を遮るものなく直接に動物を見る事が出来る。併して其收容場は極めて動物原産地の風景を模して殆ど野獸自然の生活状態を彷彿せしむるものである。

今主要なる建設物を擧ぐると次の如くである。

- アフリカカンステツパ 大岩壁を背景とする獅子放養場には數頭の獅子が放飼せられ、濠を隔て、觀覽客に對する雄大な風景を中心とし、其前方には、驢馬、大羚羊、駝鳥等の東アフリカ草原に棲む鳥獸類を放飼して以て、アフリカ動物原産地の綜合的景観を現出せんとするものである。
- 白セメントを以て北極の氷山を模し、白熊を放養する。又其前方には海獸の池があつて、海豹、海獅、おつとせい等を放し、寒帯動物の生態を示さんとするものである。
- 北極パノラマ 日本猿の群棲状態を示す放養場。
- ペンギン島 南極産ペンギン島の氷山。
- 環ヶ島 輪船なる岩壁を背景とする大放養場。獅子數羽を放し、之が羽翼を擴げて大空を飛翔する壯觀を見せんとするものである。
- 鯨類放養場 廣さ百坪、高さ五十尺の大水槽の籠であつて、孔孔雀等を自由に飛翔せしむるものである。
- フライング・ケージ 鐵筋コンクリート暖房装置の完備せる大建築で、散居し風分せられ、つれも熱帯水邊動物で、各室には獅子、樹バネ、等の植物を繁茂せしめて熱帯ジャングルの気分を出してある。
- 爬蟲類河馬館 動物、大蛇、大蠍等のテラリウム房と、河馬室とより成つてある。いしめて熱帯ジャングルの気分を出してある。
- 高等猿類館 類人猿の黒猩猩、猩々、手長猿等の愛嬌者の室である。その他、園内には池あり、橋あり、山あつて頗る風趣に富み又眺望佳き所には休息所を配し、尙兒童遊園地、野外劇場の設備もあつて一日の清遊を極ならしむる等、眞に教育、遊覽、觀光の諸作用を兼備した近代施設である。

開園前の動物園の概要



当時の東山動物園の鳥瞰図

戦争と東山動物園



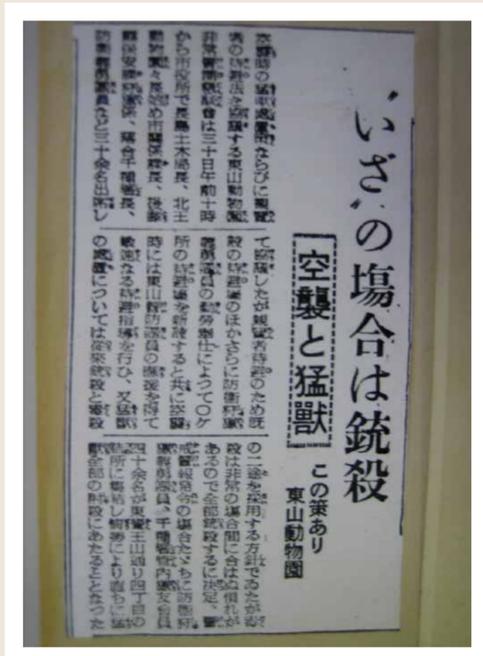
名古屋市動物園100周年

昭和16年、日本は太平洋戦争(第2次世界大戦)に突入した。人はもちろんのこと、動物たちにとっても、厳しい受難の時代の始まりであった。戦争が進み、敗戦への道を進むにつれ、国内の食糧事情は悪化した。当園でも、動物の命を守るため、餌の確保に必死の努力がなされた。野菜を栽培し、野草をかき集め、餌の自給に努めた。しかし、こうした努力にも限度があり、多くの動物たちが飢えと寒さでつぎつぎと亡くなっていった。

昭和18年には空襲時に猛獣が逃げ出してしまうことを防ぐため、銃殺する方針が出された。

昭和19年12月13日の名古屋大空襲の日、動物園は、猛獣類の殺処分を命ぜられ、ライオン、ヒョウ、トラが射殺された。

昭和20年に入ると、空襲による被害も多くなり、2月16日には、動物園を軍が使用するため閉園となった。



昭和18年の新聞記事記事



空襲に備え、ライオンの射殺訓練をする猟友会の人たち(昭和18年)



チンパンジーのバンブー

インドゾウの「マカニー」と「エルド」、チンパンジーの「バンブー」、カンムリヅル2羽、ハクチョウ1羽、その他鳥類約20羽が終戦の日を迎えた動物たちである。昭和18年には、279種961点の動物がいたことから、戦争による犠牲の大きさがうかがえる。

終戦後の復旧作業は、動物園職員が昼夜を徹して行い、昭和21年3月17日、再び開園することができた。動物園が、これほど早く再開できたことは楽しみの少ない荒廃した当時の

名古屋において、動物園の果たすレクリエーションの役割に対する期待の大きさを物語っている。



インドゾウのエルド(左)とマカニー(右)

ゾウ列車



名古屋市動物園100周年

●戦時中を生き延びたマカニーとエルド

第2次世界大戦中、軍や地方行政から猛獣を処分するようという命令が全国の動物園に下った。

しかし東山動物園では、北王園長が必死に助命の嘆願を行い、「常時、鎖でつなぎ、毎日状況を報告する」ことを条件に、処分を見合わせるようになった。

なんとか処分をまぬがれたものの、餌の確保が難題であった。昭和20年3月に名古屋第3師団管下の獣医部に転属した、三井高孟大尉が軍馬用の餌をゾウ舎の通路に置くように指示し、また飼育係も見つからないように“ふし”を抜いた竹筒を、餌の入った麻袋に差し込んで餌をすばやく抜き取りゾウにあたえた。

こうして東山動物園のゾウ「マカニー」「エルド」は、園長や職員ら関係者の努力により生き残ることができ、終戦を迎えた。

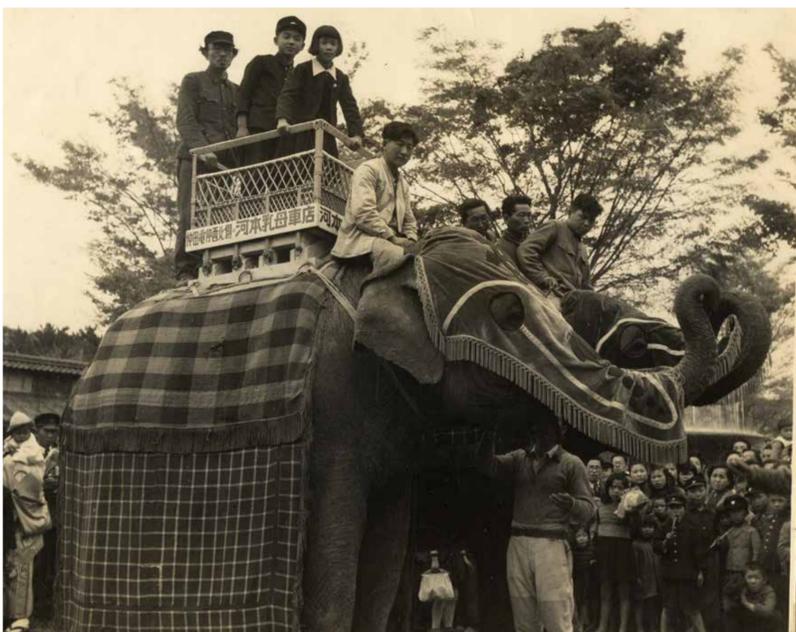
●ゾウ列車が走る!

昭和24年5月東京都台東区の子供議会を代表して名古屋を訪れた2人から、「ゾウを知らない東京の子供たちのためにゾウを1頭貸してください」と熱心なお願いがあった。

しかしマカニーとエルドの絆の強さを目のあたりにした子供議会の2人は、2頭を引き離すことができないと納得して東京へ帰った。

その後、国鉄や動物園の関係者が集まって特別列車の運行を決定し、昭和24年6月18日に滋賀県彦根市の小学5・6年生約1,000名が第1号の「ゾウ列車」に乗り東山動物園へ来園した。

ゾウ列車は昭和24年秋まで運行され、全国各地からゾウを見るために「ゾウ列車」に乗って名古屋を訪れた子どもたちは、動物園でゾウに出迎えられ、ゾウに触れ、ゾウに乗った。



ゾウに乗る子供議会の2人



ゾウ列車でやってきた子供たち

移動動物園と ニコニコサーカス



名古屋市動物園100周年

●移動動物園 昭和26年

戦後、絵本でしか見たことのない動物を、何とか子供たちに本物を見せてあげようと「移動動物園」が企画された。そして、昭和26年3月12日～5月29日の間、移動動物班を編成し、知多半島や岐阜県、三重県へと出かけた。

ライオン、ヒョウ、ピューマ、ヒマラヤグマ等が、行く先々で大変な人気を呼んだ。



行く先々で大変人気があった移動動物園



ライオンなどの猛獣を檻に入れてトラックに積み移動していた

●ニコニコサーカス 昭和26年～昭和46年

この「移動動物園」の成功の経験が、「動物サーカス」に発展していった。短期間の調教で苦労も多かったが、昭和26年10月1日、「ニコニコサーカス」と命名して開幕した。ゾウの「マカニー」、「エルド」、新しく来園した「和代」、ニホンザル2頭、アシカ、ヤギ、オウム5羽が特技を披露した。ニコニコサーカスは、楽しみの少ない子どもたちにとって最高のショーであった。そして、東山の名物となり、その後、20年間も続いた。



動物園内のステージにてニコニコサーカスの様子



20年も続き、様々な動物がサーカスに登場した

ニコニコサーカス
上手にできても、失敗してもニコニコ笑ったのがニコニコサーカスのモットー。オランウータンやパンジーのカルテット、ヤギのサブちゃん、アシカのゴロー君、サルのサン公などによる演技やお竹さんを中心とするオームによる劇団演舞などのしいサーカスはつづく。

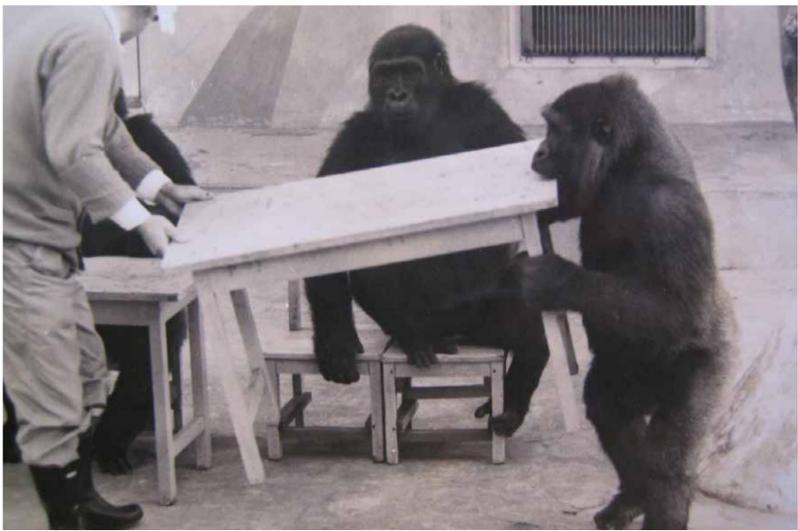
ゴリラショー



名古屋市動物園100周年

昭和34年に、アフリカのカメルーンから、3頭のゴリラの子どもがやってきた。

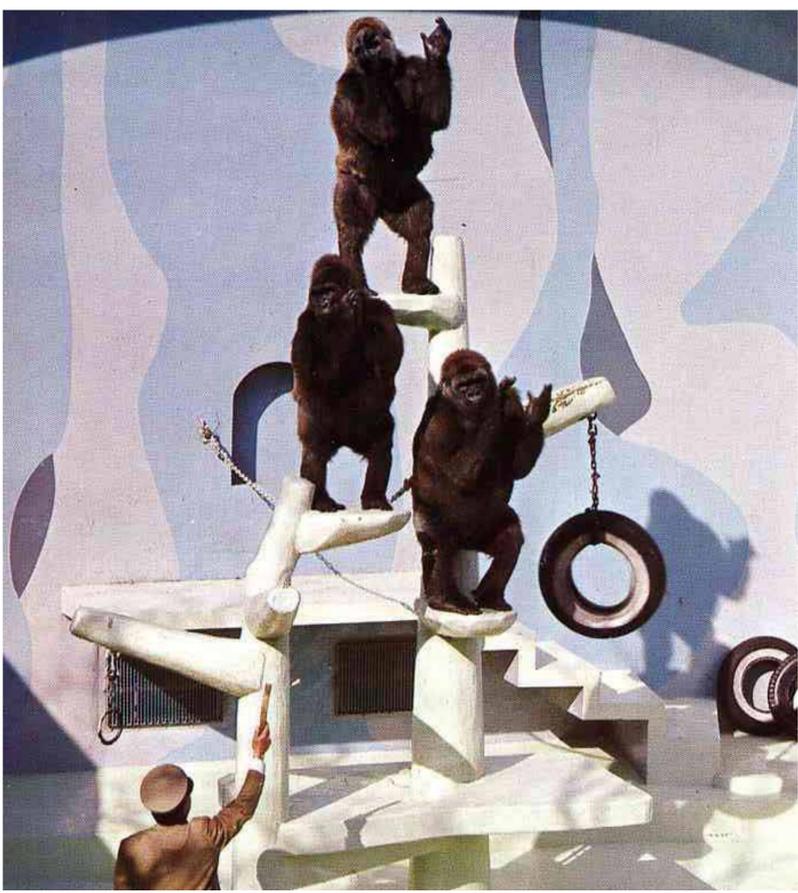
オスのゴリラは名前を公募し、「ゴン太」と名づけられた。メスは現地で名づけられた「オキ」と「プッピー」をそのまま使うことになった。飼育員の浅井力三氏は、「ゴリラたちが病気になっても、いざというときに薬を飲ますことのできるように」と、規則正しく日常生活を習慣づけるための粘り強い訓練を始めた。このことが基礎となって、世界的にもまれな20種類以上の芸をこなすゴリラに成長したのである。東山のゴリラショーは日本中を沸かせる東山の代名詞ともなったが、ゴリラが成長するに従い、野生本来の性質が現れ、人間がコントロールしきれなくなり、昭和43年6月3日、ゴリラショーは幕を閉じた。



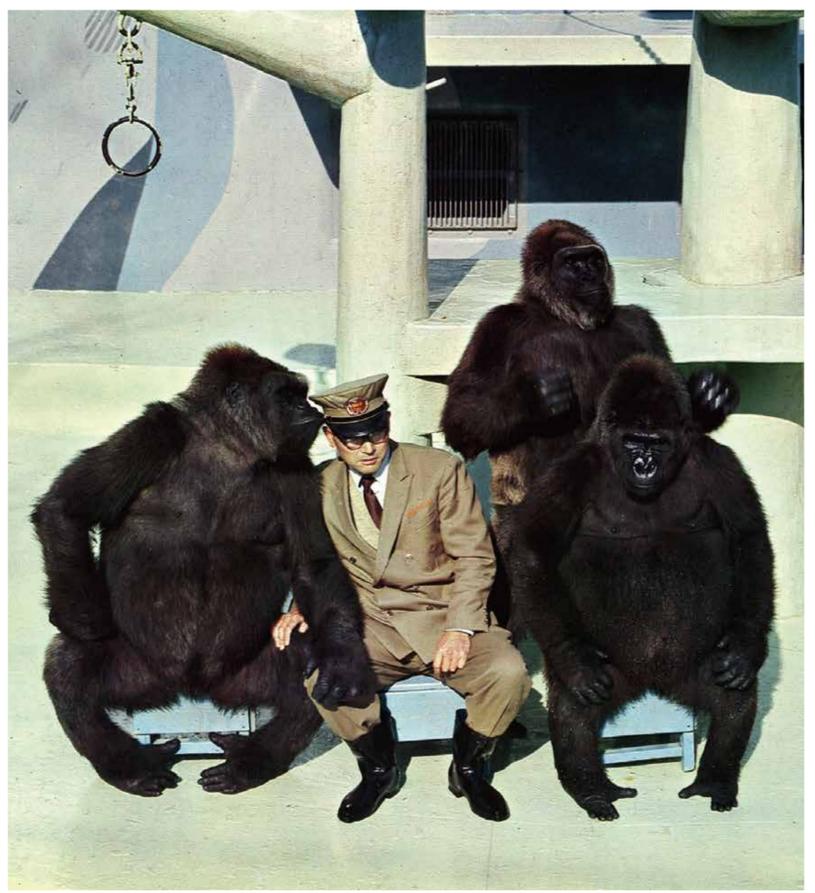
飼育員と一緒に机を運ぶゴリラ



(左から) ゴン太・オキ・プッピー・浅井飼育員



浅井飼育員の指示でショーをするゴリラたち



浅井飼育員とゴリラ(左・ゴン太、右手前・プッピー、右奥・オキ)

国際交流 コアラ来園



コアラ輸送の特別機

昭和50年代に入ると、動物園の国際交流は、大きく広がった。昭和52年に開催された「オーストラリア・フェア」(東山動物園開園40周年記念)は、自然を通じて両国の理解を深めるという大きな役割を果たし、ウォンバットやインコ類などが多数来園した。さらに、昭和53年のメキシコ市、南京市、昭和55年のシドニー市との姉妹・友好都市の提携により来園した動物大使たちが交流の舞台で活躍した。そして、昭和59年は、東山にとって昭和50年代を締めくくるにふ

さわしい国際交流の年であった。4月11日に南京市長ら一行が東山動物園を訪れ、念願のマヌルネコが贈られた。10月25日には、長年の準備と努力が実り、2頭の雄コアラの「モクモク」と「コロコロ」が日本に初めて来園したのである。動物大使たちは、各国、各都市との友好の絆を強く結びつけ、その親善の役割を十分に果たした。



モクモク



コロコロ



公開式典の日から連日多くの人々が並んだ



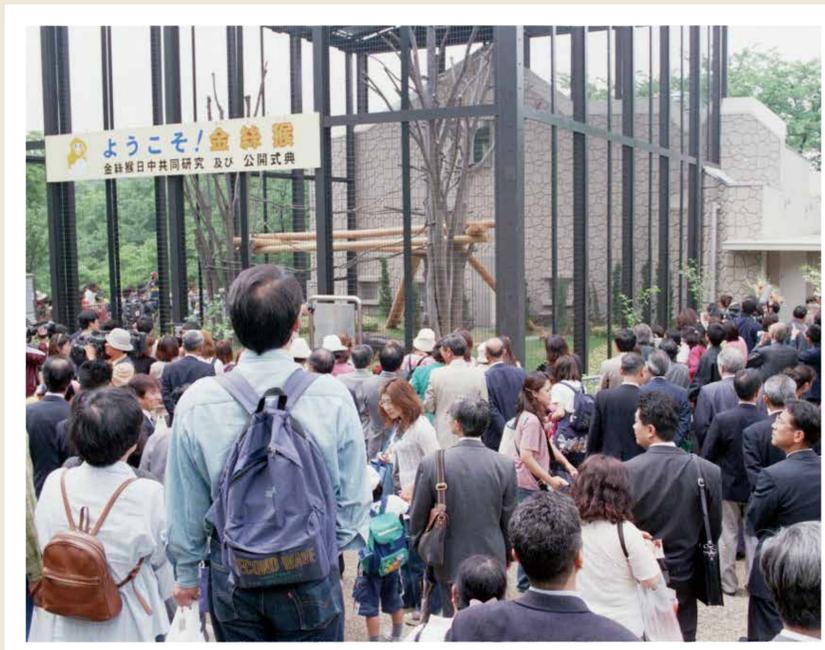
到着したコアラを箱から出す

国際共同研究 キンシコウ



平成12年、日中共同研究として、希少種であるキンシコウ雄「ユウユウ」雌「アイアイ」「ハオハオ（後に「リリ」に改名）」が来園した。リリは平成18年に残念ながら死亡してしまうが、ユウユウとアイアイの間には「モモ」「カンカン」「シュウシュウ」「キキ」「メイメイ」の5頭が生まれた。先に生まれた3頭は成育後にその都度中国へ返還し、平成22年3月に残る4頭を中国甘肅省瀕危動物研究中心へ無事返還してキンシコウの飼育を終了した。

返還までの10年間には、中国からのキンシコウ専門員や視察団が何度も来園し、キンシコウの飼育・研究分野で職員と交流を深めた。また、国内の大学との共同研究などによってキンシコウの繁殖生理や行動、病気、仔の発達、体温変化など多岐にわたる研究成果を残した。



平成12年一般公開式典の様子



記念すべき第1子のモモが誕生



東山動物園のキンシコウのロゴマーク



平成21年キンシコウ日中共同研究閉幕式

東山動植物園 再生プランの始動



平成22年5月に発表された再生プラン新基本計画に基づき、シンリンオオカミ舎、アメリカバイソン舎のある北アメリカエリア、アジアゾウ舎、ツシマヤマネコ舎など次々と新しい施設がオープンし、園内の景色は年々変わっている。



シンリンオオカミ舎



アメリカバイソン舎



ゾウ舎「ゾージアム」



ゾージアム屋内観覧施設



ツシマヤマネコ舎



ハクトウワシ舎

希少動物の繁殖 「種の保存」



名古屋市動物園100周年

近年では、絶滅の恐れのある希少動物の「種の保存」のため、国内のみならず海外の動物園との共同繁殖が盛んに行われるようになった。これまでにアジアゾウ、ニシローランドゴリラ、メキシコウサギなどの繁殖に成功している。

●アジアゾウの繁殖

スリランカからやってきたアジアゾウの「コサラ」と「アヌラ」の間に東山動植物園では初となる待望の赤ちゃん「さくら」が平成25年に誕生した。ゾウ本来のメスとその仔からなる群れでの飼育を目指し、さらなる繁殖に取り組んでいる。



生後数日のさくらと母親のアヌラ(授乳中)



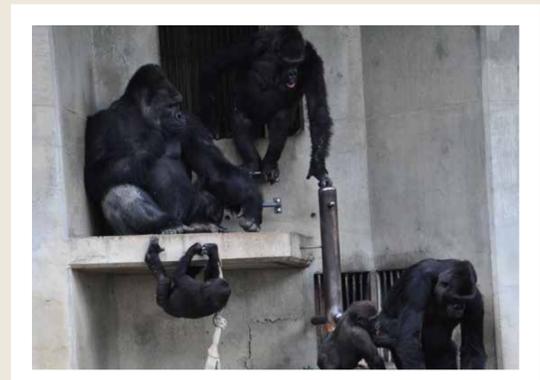
ゾーリアムでのアヌラとさくら

●ゴリラの繁殖

平成24年11月ニシローランドゴリラの「キヨマサ」が誕生した。また、平成25年6月に「アニー」が誕生した。母親「アイ」の育仔放棄のためアニーは飼育員によって人工哺育で育った。しかし、アニーがゴリラとして生きるためには群れに再導入して飼育する必要があった。計画的なお見合いなどを経て無事に群れの仲間入りに成功した。その際、群れのリーダーでシルバーバックの父親「シャバーニ」はアニーをやさしく迎え入れた。群れ形成におけるシャバーニの功績は大きい。



ゴリラ仔のキヨマサとアニー



5頭となったゴリラの群れ